

## 文学としてのマンガ⑤

—— 「引用」 について ——

山田 利博

Comics as Literature (Part V) : On Quotations as Literature Technique

Toshihiro YAMADA

### 1. はじめに

文学としてマンガを読む試みも早5回目となったが、今回は「引用」について述べてみたい。だが、そんなことを言うと、「自分の論のよりどころなどを説明、証明するために、他人の文章や事例または古人の言を引くこと」<sup>1)</sup>が、マンガとどのような関係を持つのかと、疑問を持つ向きも或いはいるかもしれない。が、ここで言う「引用」とはそのようなものではない。いや、この論が結局は明らかにしてしまうように、これですらその延長上にあるものなのかもしれないが、今回扱おうとしている「引用」とは、一応文学用語としてのそれを指す。

ただ、それとていざ考えてみると意外に難しく、良く使われる割にははっきりした定義さえ無い。しかしそれでは話にもならないので、手掛かりになりそうなものを一つ掲げておけば、それは次のようなものである。

①テキストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが、結びつき、異議をとなえあい、そのどれもが起源となることはない。テキストとは、無数にある文化の中心からやってきた引用の織物である<sup>2)</sup>。

見て分かるように、これは「テキスト」の説明であって、「引用」そのものの定義ではない。しかし、「引用」を定義しようとする者は大抵これを引くものであるし、本稿で考えるイメージも、概ねこのようなものであるので、最初に紹介しておいたが、国文学者の高橋修氏は、やはり「引用」を定義されようとしてこの文章を引かれた後、次のように続けられる。

② ただし、これは古典文学においては何も目新しいことではない。和歌・連歌における「本歌取り」、能における「本説」、平安後期物語における『源氏物語』の位置等、きわめて意識的な〈引用〉がテキストを織りあげている。なかでも謡曲において「本説」(根拠となるべき説)を方法化した世阿弥は、その能楽論『風姿花伝』で典拠が正しいことを名曲の第一条件として挙げている<sup>3)</sup>。

元々は平安時代の散文を専門とする稿者としては、全く同感するところであるが、それ故か最近の文学作品については、一抹の淋しさを禁じ得ない。と言うのは、こうした「伝統」を受けた作品が、余り見受けられないように思うからである。勿論、平安後期の散文『浜松中納言

物語』を典拠としたことを自ら明かす、三島由紀夫の『豊饒の海』や、題名からして『源氏物語』を「引用」したに違いない、倉橋由美子の『夢の浮橋』のような作品が、現代でも無いことはない。けれど、全体から見ればごく僅かだし、稿者が知らないだけかもしれないが、ここに挙げた例からも知られるように、不思議なことに「引用」されるのは古典作品ばかりであり、つい最近のものが引かれるなどということは皆無に近い<sup>4)</sup>。そんなことを言うと、「引用」は所詮オリジナリティが無いのだから、そんなものを求めること自体が間違っていると思う向きも或いはあるかもしれない。しかし、「引用」にもオリジナリティが無いわけではないことは、本稿を読んでいけば最後には納得されるであろうし、そもそもオリジナリティ自体が、本当にそれほど価値があるものかどうかですら、今まで余り考えられたことがない。

勿論、稿者も現代人の端くれである以上、この「オリジナリティ信仰」から完全に自由であるわけでもないが、「伝統」と全く無縁なオリジナリティが存在して良いものかどうかは聊か疑問に思うのである。何故なら、それでは過去というものは、単なる無駄な時間の集積になってしまうように思えるからで、一度「伝統」を踏まえ、そこから逸脱していく部分を持って一つのオリジナリティとするのが正しいやり方だと思うのだが、そのような大きな問題について論じるには、一つの論文ぐらいでは無理である。そこで、本稿でもその問題を正面切って扱うことはしないが、「引用」とは、そこに至る一つの階梯だと御理解いただければ幸いである。

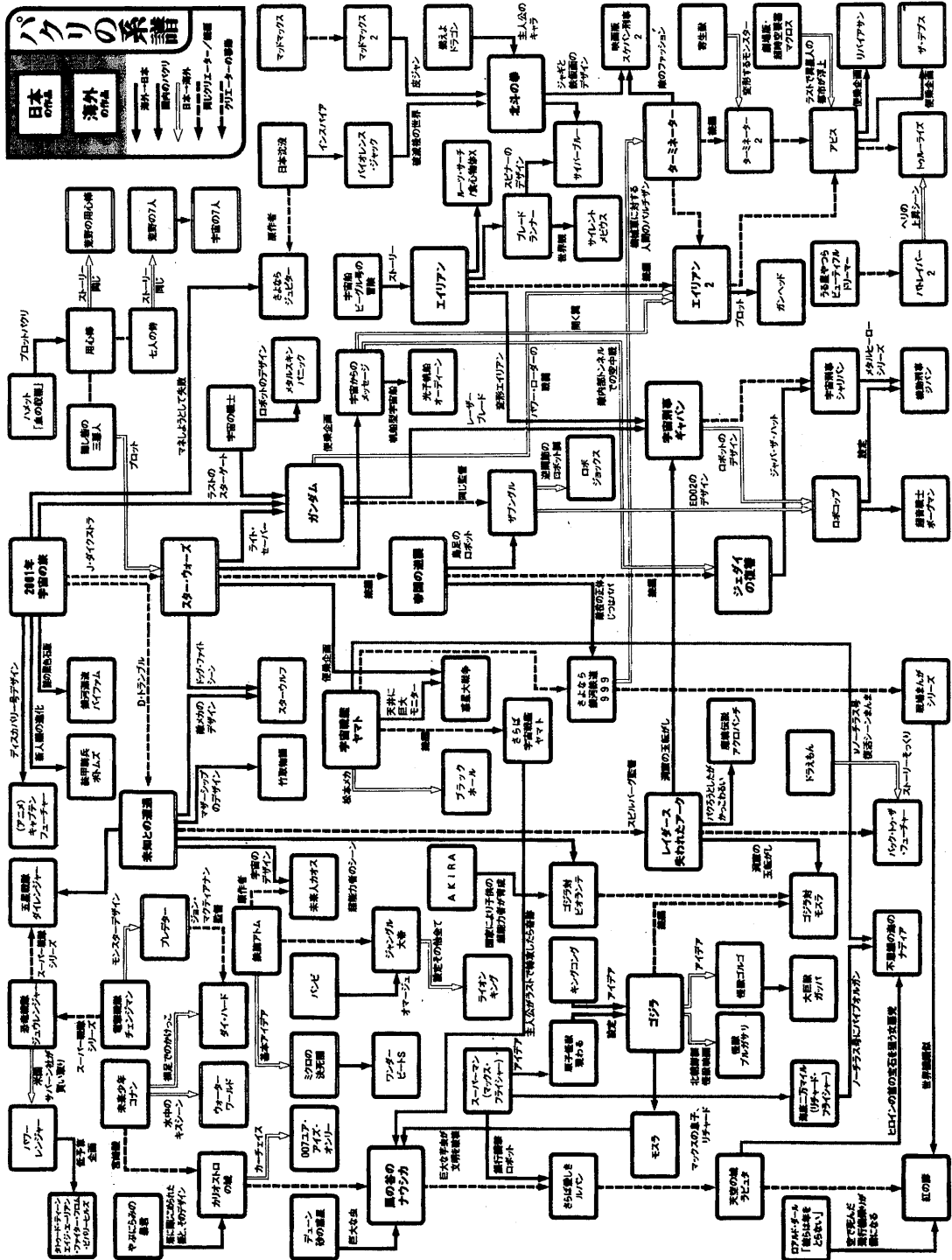
さてその「引用」であるが、これも意外と思われるかもしれないが、現代マンガにおいては未だにある。つまり、今まで数度にわたって述べてきた<sup>5)</sup>ように、これもまた、現代マンガが古典と通ずる点として指摘できるわけであるが、これはおそらく、これまで述べてきたようなことと関わりがあるだろう。すなわち、最近、文庫本化が進み、段々とそうではなくなってきたとは言え、ついこの間まで読み捨てを原則としてきたマンガは、価値観などとは無縁なものであり、それ故「オリジナリティ信仰」になど、余り縛られなかったためであろうと思う。

だが、理由はともあれ、現代マンガに「引用」の技法が残っていることだけは確かなのであり、それは例えば、1995年から2年ほど、東大で「オタク文化論」を講じた岡田斗司夫氏の著書で、その時のテキストらしい『オタク学入門』（太田出版 1996）でも、一節を割いて説明されている。それを一望できるように彼がまとめた図を参考までに次頁に掲げておくと、彼は文学の専門家ではないので、見て分かるように、それを「パクリ」と呼んでいる。勿論これでも良いのだが、学術用語としては聊か不穏当かと思ひ、また、元から使われているものが無いではなかったので、本稿では「引用」という語を使用する。

ただ、この本が出てから既に4年が経過し、その間に新しい作品も多数生まれたし、当然の事ながら、その論述には「古典」などという視点が無かったので、ここで新たに論じてみようと思ひ立ったのであるが、その前にもう一つだけやらなければならないことが残っている。それは「引用」の範囲の認定である。

先程「引用」は「パクリ」とほぼ同義であると述べたが、もう一つ「影響」と言い換えることも出来る。ただ、それをすると無意識下の行為も含むことになり、勿論それでも良く、「引用」という用語ですら、それを含まのだとしている学者も多いのだが、これは稿者の信条とも言うべきものであろうか、学問というのは、出来得る限り証明可能であるべきだと思うので、「引用」はやはり意識下の行為に限定してみたい。と言うのは、②の引用文に既に書かれていたように、古典における「引用」は、意識下のものであったと思う<sup>6)</sup>からでもある。そこで本稿では、何らかの証拠により、意識下における「引用」と認定できるもののみを扱うこととするが、無論、意

(参考図) 岡田斗司夫『オタク学入門』(太田出版 1996年) PP.64~65



識と無意識の間に正確な線が引けるはずもない。したがって、その認定も所詮断言できるほどのものではないことも、最初に御理解いただきたい。

## 2. 現代マンガにおける「引用」の諸相

本稿における「引用」という語の定義は、前節で一通り述べたつもりだが、一口に「引用」と言っても、そこには様々なレベルがあると思われる。勿論それらを分類しきることなどとても出来ないが、いたずらに項目を増やしても、逆に分類する意味が無くなると思うので、本稿では仮に3項目に分けてみよう。すなわち、(1) タイトルを含む言語レベルの「引用」、(2) 設定レベルの「引用」、(3) 主題、乃至は作品構造まで含めた「引用」の3つである。

まず(1)から始めれば、参考に掲げた、岡田氏が作成された図中に見える、『ふしぎの海のナディア』(GAINAX制作 89年10月～90年9月 NHK総合テレビで放映)とルイス・キャロル作『不思議の国のアリス』<sup>7)</sup>、(2)で詳しく述べるが、96年9月から97年3月にかけて、テレビ東京で放映された、麻宮騎亜原作の『機動戦艦(マンガ版では遊撃宇宙戦艦)ナデシコ』と『宇宙戦艦ヤマト』(74年～83年)<sup>8)</sup>、或いは、99年10月から2000年3月にかけてWOWWOWで放映された、矢立肇原作の『THE ビッグオー』と手塚治虫原作の『ビッグX』(64年8月～65年9月フジテレビ放映)と、少し考えただけでこれだけ頭に浮かぶが、その他にも、例えば、96年10月から始まった『魔法少女プリティーサミー』の第1回のサブタイトル「サミー大地に立つ」は、79年4月から始まった『機動戦士ガンダム』の同じく第1回、「ガンダム大地に立つ」を明らかに「引用」している<sup>9)</sup>とか、先程の『ナディア』の第24話「リンカーン島」では、主人公ナディアが自分のことを、「そりゃあ私は少しはおちゃめでおてんばかもしれないわ。あわてんぼなところもあるわよ。時々おセンチになる時もあるけど、サーカスにいた時はかわいい人気者だったんだから」と言い、それに対してボーイフレンドのジャンが「ちえ、しょってらあ」と応じる<sup>10)</sup>など、その下のレベルでまで行われ、およそ枚挙にいとまがない。大体、稿者も含めて、所謂オタク同士の会話とは皆このようなもの<sup>11)</sup>であり、いわばこれは、マンガ・アニメにおける「引用」の基本であるから、切りが無いのでこの位でやめる。

さて次は(2)の例であるが、これについても色々と考えられるけれど、一番分かりやすいものは先程紹介した『ナデシコ』と思われるので、それを元に少し説明してみたい。だがこの場合は、その粗筋までもが問題となるのでアニメを中心にそれを述べておけば、概ね次のとおりである。

時は西暦2195年、人類は、突如木星宙域に出現した謎の宇宙生命体の攻撃を受ける。正体不明のその敵を、人々は取り敢えず「木星トカゲ」とか「バッタ」とか呼んだが、実はそれは、昔地球から木星に移住し、地球からも、己自身も元は地球人であることを忘れた人々であると知るの、物語がだいぶ進んだ後のことである。その「トカゲ」は、地球を圧倒的に上回る科学力を有し、地球側は火星などの植民地を次々と失い、後は本星を残すのみとなる。もはや連合宇宙軍に「トカゲ」を押さえる力は無いと判断した一企業NERGAL(ネルガル)重工は、独自に宇宙戦艦を建造し、それをナデシコと命名する。そして、腕前だけは超一流だが、皆どこかに性格的欠陥を持つために、自ずと軍等からはみ出してきた者達を次々とクルーとして採用し、火星にまだ取り残されているかもしれない人々を救うため、軍と衝突しながらも火星に向かうというのが取り敢えずの筋である。勿論これはその発端にすぎず、物語はこの後、連合宇宙軍提督の娘(20歳)で、地球連合大学在学時には、戦略シミュレーションでは不敗を誇り、確か

にここ一番という時には充分活躍するけれども、普段は幼なじみでパイロットのテンカワ・アキトに夢中で、彼も自分のことを愛していると疑わず、公務もそっちのけで追いかけて回せばかりいる艦長ミスマル<sup>12)</sup>・ユリカと、その幼なじみで、天才的パイロットでありながら、第1次火星会戦の折、目の前の一人の少女を救えなかったが故に戦闘が恐くなり、ナデシコにはコックとして採用されたはずなのに、その腕前が仇となり、いつもいやいや戦闘機に乗せられてしまうテンカワ・アキトの恋模様を縦軸に、アキトが優柔不断であるために四角関係が出来たり、艦長が当てにならないので、美人コンテストにより次の艦長を決めようとしたりと、この作品は半分ギャグアニメであるので、訳の分からない事件を繰り返しながら、それでも「トカゲ」の正体を明らかにし、最後には和睦に至るといふ具合に進んでいく。

しかし、本稿で当面必要となるのはその発端部で、アニメに詳しい向きならこの粗筋を見ただけでも、これは『ヤマト』を「引用」していると分かるであろう。何故なら、人類が突如謎の宇宙生命体に攻撃され、しかもそれが地球人と全く同じ遺伝子を持つという設定は、まさしく『ヤマト』の第1シリーズでの敵・ガミラスと同じだからである。因みに『ナデシコ』第1回冒頭の第1次火星会戦のシーンは、『ヤマト』第1回の冥王星会戦のそれとはほぼ同じであるし、その時の司令は、ヤマト初代艦長の沖田十三を少しスリムにしたような人物で、しかも途中で戦死してしまう（尤も沖田も第1シリーズ最後で戦病死するから、この点も或いは「引用」かもしれない）が、会戦の後、提督として一時ナデシコに乗り込むというの、やはりヤマトと共通している。さらに言えば、『ナデシコ』第3回「早すぎる『さよなら』!」で、宇宙に出るためナデシコが地球の防衛線を破ろうとする時、連合宇宙軍の攻撃を受けるというの、78年10月から翌年3月にかけて日本テレビで放映された、『宇宙戦艦ヤマト2』（ほぼ同内容の、78年夏に公開された劇場用アニメ『さらば宇宙戦艦ヤマト—愛の戦士たち』では、緊張感が高まるが、攻撃されない）の「引用」であろうと思われる。つまり『ナデシコ』は、その名のとおり、徹底的に『ヤマト』を「引用」しているわけで、これが(2)として分類した所以である。

しかし『ナデシコ』の「引用」は、独り『ヤマト』に止まらず、他の作品にまで及んでいる。例えば、粗筋で紹介した、ナデシコを建造した企業NERGALは、スペルから見て、95年10月から96年3月にかけて、テレビ東京で放映された、『新世紀エヴァンゲリオン』の、エヴァンゲリオンを管理している国連の特務機関NERV（ネルフ）からの「引用」に、ほぼ間違いのないし、アニメ版『ナデシコ』のナデシコの認識番号SD-001は、82年6月より、TBSでテレビアニメが始まり、84年夏の劇場版まで人気が続いた、『超時空要塞マクロス』の、SDF-1からの「引用」であろう。そう思えば、『ナデシコ』で、戦闘中であるにも拘わらず、いきなりラブコメが繰り返されるというの、やはり『マクロス』からの「引用」と考えられる<sup>13)</sup>し、『マクロス』以降、ほとんどそうってしまったが、ロボットに変形する戦闘機は、やはり『ナデシコ』にも登場する。さらに『ナデシコ』では、ナデシコのクルーと「木星トカゲ」の双方が、『ゲキガンガー3』という、古いロボットアニメに熱中していることになっているが、3体のマシンが合体して巨大ロボットになることや、その内の一体のパイロットが途中で戦死し、後を別の者が引き継ぐ<sup>14)</sup>ことなどは、明らかに、74年にヒットした、永井豪原作の『ゲッター・ロボ』、及び『ゲッター・ロボG』（75年）からの「引用」であるが、ロボット自体の形状は、これも永井豪原作の『マジンガーZ』（72年）、或いは『グレートマジンガー』（74年）からの「引用」と考えられる<sup>15)</sup>。また、敵の一人は、77年にヒットした、『超電磁マシン・ボルテスV（ファイブ）』に出てくる、悲劇の司令官、プリンス・ハイネルに似ているというように、ほとんど枚挙にいとま

がない。①の引用文に、テキストとは「引用の織物」とある意味は、これにて少しは実感されるであろうが、現代マンガが「引用」するのは、自身と同じマンガだけとは限らない。それは、これまで挙げた例の中にも、幾つか普通の文学作品が混じっていたことでも薄々察しられようが、より適切なものは、2000年1月26日から4月19日にかけて、WOWWOWで放映された、大地丙太郎（だいちあきたろう）監督の『風まかせ月影蘭』と思われるから、続いてそれを見てみよう。

その作品は、腕はめっぽう立つけれども浪人<sup>69</sup>で、自称美人（とは言っても、別に不美人というわけではない）の女剣士・月影蘭と、猫鉄拳という拳法の達人だけれど、能天気な性格で、蘭曰く「お調子者」の、中国女性らしきミャオの二人連れが、喧嘩しながらも気ままな旅を続け、行く先々で出会う悪を倒していくという、一昔前の時代劇には良くあるパターンアニメである。そのためか、実際よく似た設定の作品は、30年ほど前の時代劇（勿論実写）に存在する。それは、69年10月から70年3月にかけて、NETで放映された、花園ひろみ・大信田礼子出演の、『緋剣流れ星お蘭』である。この作品は、花園扮するところの美貌の女剣士・流れ星お蘭と、大信田扮するところの、正義漢だがおっちょこちょいの女の旅人・雷のお銀が、行く先々で悪を倒していくという、まさに『月影蘭』そのままの設定で、雷のお銀は、別に中国人でも拳法の達人でもなかったが、主人公の名前まで一致するところから、多分この作品から「引用」したと見て間違いなからう。では「月影」はどこから来たかと言えば、これも時代劇に詳しい向きならずにお分かりだろうが、65年の10月からNETで始まり、中断期間を挟んで67年1月から68年12月にかけても放映された、近衛十四郎・品川隆二出演の、『素浪人月影兵庫』からであろう。尤も、月影蘭の大好物が、別に悪酔いするわけではないけれども、おからを肴に酒を飲むことというのは、『月影兵庫』を受けて69年1月から始まった、同じく近衛・品川出演の、『素浪人花山大吉』の方の設定であるが、いずれにせよ『月影蘭』は、これら3作品を適度に「引用」して成立していることは間違いない。

このように、マンガ・アニメ作品は、己より先行する作品は、ジャンルを問わずに貪欲に取り込んでいる特異な存在と位置づけられるのであるが、その最たるものは、(3)の、主題、乃至は作品構造まで「引用」している例と言えるので、続いてそれを見てみよう。

(3)を考える時注意したいのは、所謂原作付きのものはそれとして数えてはならないだろうということである。何故なら、それらは単に文字をマンガに置き換えているにすぎず、別に「引用」しているわけではないからである。つまり、「引用」とは基本的に別作品として成立しているべきだと思うのだが、実を言えば、これもそれほど明瞭な線が引けるわけでもない。しかし、たとえ題名が違って、大和和紀『あさきゆめみし』（80年～93年）を『源氏物語』の「引用」とするにはやはり抵抗があるし、内容はだいぶ違ってはいるようだが、『神八剣伝』（98年4月～99年9月、テレビ東京放映）を『南総里見八犬伝』の「引用」とすることにも、また同様に抵抗がある。そこで今回は、これらのものは一切除外して考えたいが、それでも、かなりの数の作品が残るのであり、長くなるので名前だけを2, 3列挙すると、手塚治虫『鉄腕アトム』（テレビアニメは63年1月～65年12月）と『ピノキオ』<sup>70</sup>、水木杏子原作・いがらしゆみこ作画の『キャンディ・キャンディ』（75年3月から79年2月まで、講談社『なかよし』連載）とジーン・ウェブスターの『あしながおじさん』、或いは、まだ連載が終了していないので断言するわけにはいかないけれども、美内すずえの『ガラスの仮面』（76年～）も、やはり『あしながおじさん』の「引用」として位置づけられるのではないかと思う。つまりこの技法も、或る作品固有のもので

はなく、広く一般的に認められると思うのだが、名前を挙げただけで分かれということのも無理な話なので、一つだけ詳しく分析することにする。それは、松本零士の『銀河鉄道999』（77年～81年、少年画報社『週刊少年キング』連載）と宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』なのだが、拙稿を続けてお読みいただいている方はお分かりのように、この作品は前回<sup>18)</sup>一度取り上げている。見る角度が異なるとはいえ、同じ作品を2度扱うのは余り気が進まなかったのだが、この分析をするためには、「引用」した作品もされた作品も両方有名である必要があり、かつ、細部までこれほどきれいに対応している作品を他に思いつかなかった。諒とせられたい。

本来なら作品の粗筋紹介から始めるが、先にも述べたように、『999』は有名な作品であると思うし、前稿でも既に紹介しているので、今回はそれは省略する。『999』が『銀河鉄道の夜』（以下『夜』と略称）を「引用」していることは、その題名からも薄々知れる（つまり『999』は、本稿で分類した（1）もしている）ことと思うが、その他に、鉄郎とメーテルが持っているパスが「無期限定期」<sup>19)</sup>であること、及び、銀河鉄道が停車する駅ごとに事件が起り、それによって話が紡がれていく形式であることも共通する。さらに言えば、前稿でも少し触れたように、メーテルの正体は、鉄郎の「青春の幻影」<sup>20)</sup>であるらしく、例えば、第15巻（81年1月発行）第3話「メーテルの旅」の最後（P.132 5コマ目）には、例の巻紙のナレーションで次のようにある。

③ふと鉄郎は感じた／鉄郎と旅をして／いるメーテル／は　メーテルと／いう名の幻では／  
ないのだろうか…／メーテルの幻がたく／さんいて　いろいろな世／界の若者や少年と  
旅を／しているのではないだ／ろうかと……／もしかして……鉄郎の／旅は　本当は鉄郎  
ひと／りきりの旅ではないだ／ろうかと……  
（／は改行）

すなわち、鉄郎の目の前にいるメーテルは実は幻にすぎず、本当は鉄郎は一人きりで旅をしているということなのであるが、これもまた『夜』と同じであることは言を俟たない。御存知のこととは思いますが、『夜』でジョバンニとともに銀河鉄道で旅をしたカンパネラは、実はその時点で既に水死しているのであり、ジョバンニの目の前にいるのは幻にしかすぎないからである。さらに付け加えれば、メーテルの名の由来は、『青い鳥』の作者メーテルリンクであるらしく<sup>21)</sup>、それはテレビ版オープニング・テーマで、リフレインを入れて3度ほど「青い小鳥」という語が繰り返されることから確認できるが、「青い鳥」と言えば、言うまでもなく「ほんたうのさいわひ」の象徴である。カッコを付し、わざわざ旧仮名遣いで書いたのは、別に気取ったわけではなく、紛れもなくこの言葉は『夜』にあり、しかもこれを探ることが『夜』の主題であるらしい。そして『999』の主題は、前稿で論じたように、限りない命より限りある命を選び取ること、すなわち、松本零士なりの「ほんたうのさいわひ」を探す物語なのである。つまりこれが、主題まで「引用」という所以であり、本稿冒頭で、文学用語としての「引用」も、所詮は「自分の論のよりどころなどを説明、証明するために、他人の文章や事例または古人の言を引くこと」であるかもしれないと言った所以なのであるが、もはやここまで来ると単にパクリとか換骨奪胎とかいう言葉で表すべきものではないだろう。私見によればこれは、松本零士による『夜』の解釈なのであり、それを敷衍し、作品化したものが『999』であるわけである。ここまで言えば、「引用」は決してオリジナリティが無いわけではないという、これも、本稿最初で述べた言葉が理解されると思うが、最後に何故松本零士がこれほどのことが出来たか一言しておけば、彼が『夜』をマンガ化したのは、実はこれが初めてではなく、71年に、そのものズバリ『夜』という作品を発表していることが挙げられる。尤もそれは、題名が全く同一であることから窺えるように、単に『夜』をマンガに置き換えただけであつたが、この時の経験を

生かし、彼なりの『夜』を展開したのが、『999』だったのである。

### 3. まとめ

以上、本稿では、現代マンガと古典に共通する要素の一つとして「引用」について論じてきたが、正直言って少し疲れた方も多いのではないかと思う。と言うのは、「引用」の技法を楽しむには、作者だけが努力してもだめなので、読者側にもそれを理解できるだけの知識が必要だからである。いわば「引用」は、作者と読者が協力して作品の意味を紡ぎ出すことで、相当高度な営為だと思ふのであるが、それが徐々に失われていくのは、最初にも述べたように、淋しい限りである。勿論皆このような作品である必要はなく、また、皆このような読み方をしなければならないものとも思わないが、世の中すべて軽薄短小になっていく昨今、少しはこのようなものもあっても良いのではなかろうか。

### 注

- 1) 小学館『日本国語大辞典』「引用」の項。
- 2) ロラン・バルト著、花輪光訳『物語の構造分析』（みすず書房 1984（第6刷））「作者の死」PP.85～86。
- 3) 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織『読むための理論』（世織書房 1994（第5刷））「引用」の項。
- 4) 井上ひさし『ドン松五郎の生活』は、夏目漱石の『吾輩は猫である』を「引用」した作品と言えるかもしれないが、いずれにせよ数は少ないはずである。
- 5) 拙稿「文学としてのマンガ——現代版竹取物語・「セーラームーン」について——」（『宮崎大学教育学部紀要』人文科学 第85号（1998年9月）、「文学としてのマンガ③——現代マンガにおける異界表現について——」（『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学 第1号（1999年9月）、「文学としてのマンガ④——時と向き合った諸作品——」（『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学 第2号（2000年3月）等。
- 6) 無論これにも異を唱える人はいる。
- 7) 或いはこれは、81年に、フジテレビで放映された、『ふしぎな島のフローネ』からの「引用」であるかもしれないが、「な」と「の」の違いは大きいかと思ひ、こちらと認定した。いずれにしても、「引用」であることに違いはない。また、『ナディア』の内容は、途中から全然違っては来るが、ジュール・ベルヌ作『海底2万マイル』からの翻案ということに一応なっている。
- 8) お分かりかとは思ふが、ヤマトだからナデシコなのである。因みに、マンガ版では、懐かしのメロデューである、小泉今日子の「ヤマトナデシコ七変化」を愛聴していた艦長ミスマル・ユリカが命名したとあるし、だいたい後に、ヤマト・ユニットというものが開発され、それを搭載して以降、実にしばしばナデシコは、ヤマト・ナデシコと呼称される。
- 9) 尤もこの「ガンダム大地に立つ」は、アニメ制作者の間でよほど印象に残っているらしく、他にも第1回が「～大地に立つ」というのはある。
- 10) 言うまでもなくこれは、66年12月から68年12月にかけて、当時NETと称していた、現テレビ朝日で放映された、横山光輝原作『魔法使いサリー』カラー版のエンディング・テーマ、「お茶目でお転婆あわてんぼ。～かわいいサリーは人気者（ちえ、しょってらあ）」の「引用」である。
- 11) 例えば、庄司卓原作の『それゆけ！宇宙戦艦ヤマト・ヨーコ』（元は小説であるが、テレビアニメは、99年4月から9月にかけて、テレビ東京で放映）に出てくる御堂まどかは、同人誌まで作っているオタ



- クという設定であるため、出撃時に「いま～す」（『ガンダム』第1作の主人公アムロ・レイの出撃時の科白）と言う。
- 12) 『古事記』上巻、及び『日本書紀』神代上天の岩戸の条に登場し、三種の神器の一つ、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）へと繋がっていく「八尺瓊勾玉の五百津の御統」（いほつのみすまる・但し、表記は『日本書紀』による）からの命名らしい。因みにナデシコの制御コンピュータも、それらに登場する知恵の神の名と同じ思兼（おもいかね・これのみアニメでも漢字が出てくる。但し、この表記も『日本書紀』のもので、『古事記』では「思金」）。これらも、「引用」の一つと言えるかもしれない。
  - 13) マクロスは、全長1.2kmという巨体であり、しかも初回のホールド航法（ヤマトのワープ航法のようなもの。ただし、マクロスの場合は、艦のみではなく、周りの空間ごと移動する）の失敗により、付近の街を巻き込んだので、止むなくその住人及び建物を艦内に取り込んだという設定であるため、戦闘シーンと一般庶民の日常が、交互に交錯する方式を採用。
  - 14) 但し、『ゲッター・ロボ』では、戦死するのは3号機のパイロットであるが、『ゲキガンガー3』では2号機のパイロットである。
  - 15) マジンガーZとグレートマジンガーは、形態がほとんど同じであるので、どちらからの「引用」かは判定できない。
  - 16) 女の浪人など、制度上あるはずはないが、そういう設定なので仕方がない。
  - 17) テレビで偶然見ただけなので今出典を明らかにし得ないが、生前、手塚自身がそう語ったのを見たことがある。
  - 18) 注5)の3番目のもの。
  - 19) 「無期限定期」という言い方にも矛盾があるが、こういう名称であるのだから仕方がない。なお、『夜』でジョバンニが持つ切符は、無期限というわけではないのだが、どこまでも行けるもの、すなわち距離的に無限な切符である。
  - 20) 少年画報社ヒットコミックス『999』第18巻（81年12月発行）P.207 5コマ目。
  - 21) これも松本零士自身の言葉による。

(2000年4月28日受理)

